

グレアム・グリーンと入学願書

Graham Greene and his Application to Berkhamsted School

岩崎正也*

Masaya Iwasaki

1

グレアム・グリーンは故郷にたいする愛と憎しみの葛藤にさいなまれながら、書くことをとおして、郷里へ家族探しの旅を続けた作家であると言えることができる。この点でグリーンが生れてから大学に入るまでの17年間を過ぎたバーカムステッドでの家族関係を探ることが、その生涯と文学を解明する出発点になる。なぜならグリーンが自伝の冒頭で、「このバーカムステッドに最初の原型があり、そこからものがごとく無限に再生されることになった¹⁾」と書いているからである。

1904年10月2日、グリーンはイングランドのハーフォードシャーにあるバーカムステッドで生れた。ロンドンの27マイル北西にある、人口約16,500人の小さな町である。そこを南東から北西にかけて貫く幹線道路がハイ・ストリートである。これと並行してすぐ北にグランド・ユニオン・キャナルという運河が流れ、その北側にはイギリス国鉄の鉄道が町並みと並走して、学校の裏手にバーカムステッド駅がある。ハイ・ストリートの繁華街の北側にセント・ピーター教会が建ち、その右手のキャッスル・ストリートを下ると、教会の裏側に赤煉瓦の学校がある。

グレアムが生れた年、父チャールズ・ヘンリー・グリーンは39歳、学校の副校長であるとともにセント・ジョンのハウス・マスターを務めていた。母メアリアン・レイモンド・グリーンは32歳、寮生たちの給食を担当していた。

グレアム・グリーンという名で世に知られている作家の本名はヘンリー・グレアム・グリーンである。ヘンリーの名は父親から、グレアムはおじのサー・グレアム・グリーンと小説家R. L. スティーヴンソンの子孫のグレアム・パルフォーから取ったものである。グレアムは生れてから一か月後に、校長のトマス・チャールズ・フライの司式によりイギリス国教会の洗礼を受けた。グレアムの兄弟姉妹は全部で六人いる。上からモリー、ハーバート、レイモンド、グレアム、ヒュー、エリザベスと続くのだが、グレアムは上から四番目、兄弟では三男である。六人の年齢差は次のとおりである。モリーとハーバートは七歳、ハーバートとレイモンドは三歳、レイモンドとグレアムは三歳、グレアムとヒューは六歳、ヒューとエリザベスは四歳。だからモリーとエリザベスとは二十三歳の開きがある。またグレアムを基準にすると、レイモンドが三歳上、ハーバートが六歳上、モリーが十三歳上、逆にヒューが六歳下、エリザベスが十歳下になる。

2

十三歳のとき、グレアムはシニア・スクールの生徒として全寮制のセント・ジョンに入る。セント・ジョン寮の不潔さと残酷さ——これがグリーンに最初に意識した悪の実体だが、自伝の中で次のように記される。

私は文明をあとにし、奇妙な慣習と説明のつ

*教授

かない残酷さのある未開の国に入り込んだのだ。そこでは私は異邦人であり、容疑者だった。不審な共犯者がいることが知れわたっている文字どおりの追われる生き物だった。父は校長ではないか。私は占領下にあるクィスリングの息子のようなものだった²⁾。

グレームは校長の息子であるという理由で、父と、寮長を務めるレイモンドに代表される体制側と、それに対抗するいとこのベンを含む生徒集団の反体制側のどちらにも帰属することはできなかった、ということはこの文章は示している。これにたいしグリーン伝の著者ノーマン・シェリーは、「グリーンが置かれた境遇を表すのに用いた感情表記の言葉を正当化するものはほとんど見当らない³⁾」と前置きして、次のように反論する。たしかにグリーンは校長の息子だが、自宅のあるスクール・ハウスとセント・ジョン寮の距離はわずかしがなく（筆者の調査によれば約7分）、兄レイモンドやいとこのベンやトッターも同じ寮生であり、人格形成に傷害を残さないで卒業している。また当時の運河荷役労働者の子どもたちに比べれば、グレームが富と階級の点ではるかに有利な立場にあったことを考えると、その衰弱した生活態度と寮での苛めの記事は重要ではないと言う。さらにシェリーはグレームがクロッカーの芝生に潜むときの心象風景を取り上げて、この記憶は誇張ではないが、その表現に注意しなければならないと述べた後で、グレームはカルチャー・ショックを受けたのだと記す。

セント・ジョンではカーターとウィーラーの二人組がグレームの忠誠心を利用して体制側を裏切るように働きかける。その点についてグリーンは自伝の中で、「子どもたちはひどく残酷になれるものだが、私には何の肉体的な拷問も加えられなかった⁴⁾」と書くが、三十二年前の『掟なき道』(The Lawless Roads, 1939)の「プロローグ」では「コリファックスがいて、拷問を加えた⁵⁾」と肉体的な苛めがあったことを示す。この旅行記出版のころはカーターは健在だったので、コリファックスという仮名で現れるが、自伝出版のときはすでに死去していたので、実名で登場する。ライオネル・アーサー・カーターは1904年5月12日

に生れ、1971年5月17日に死去。年齢はグレームよりわずか数か月上だったに過ぎない。このようにグレームが「追われる」を意識したのはセント・ジョンに入って以後のことと考えられている。マリー＝フランソワーズ・アランとの対談で、『分裂した忠誠心』が現れたのは少年期と青年期の間ですが、それ以前はどうだったのですか」と聞かれて、「幸福な状態だよ。少年時代は十三歳まではきわめて平穏だった。家庭から寮へ送り出されるまではね⁶⁾」と答える。

はたしてグリーンの言うとおりに、自我の分裂と生活の破綻は十三歳以後の環境が変わったために生じたのだろうか。その前兆はジュニア・スクール時代の逃避と欺瞞の態度や、小学校入学以前に家庭内で培われた過剰な恐怖感覚の中にすでにあったのではないだろうか。

狭い一つの場所にいる17人ものグリーンの数は今日でさえ人々の割合からいうとひどく高いように思われるし、また休暇のときになるとその人数は100人の四分の一近くになることがあった⁷⁾。

グリーンが自伝の中で述べたこのグリーン一族の繁栄は、弟のヒュー・グリーンへの伝記『さまざまな人生』(A Variety of Lives, 1983)の著者マイケル・トレイシーによると、曾祖父のベンジャミン・グリーンがビールの醸造業を他人から引き継ぎ、後に妻の父からセント・キッツ島にある広大な砂糖農園を購入したときに始まる。次の祖父の時代には、ビール醸造業のほかにもロンドンの金融界に進出し、さらに父の世代は富の上に、社会的な名声と知性とを獲得した。その結果、ブラジルのコーヒー園で財を成した父の弟のエドワード・グリーン一家が金持のグリーン、そして父の一家がインテリのグリーンと呼ばれるようになった。

グリーン家は中産上層階級に属していたので、子どもたちはエドワード朝の生活様式に従い、乳母主導型の日を次のように過す。

- (1) 朝、子ども部屋で朝食を取り、そこで過す。
- (2) 午前11時頃、下に降りて母親と一緒に過す。
- (3) 昼食を子ども部屋で取る。

- (4) 午後、乳母や子守と一緒に散歩に出る。
 (5) お茶の時間は子ども部屋で乳母と一緒に過す。
 (6) その後、応接室で母親から本を読んでもらう。
 (7) 夕食。就寝。

このように子どもたちは必然的に両親から離れて、大部分の時間を乳母たちと過さなければならなかった。しかし十三歳までは、グレアムにとってこの生活の仕方は少なくとも孤独ではなく、仲間意識と愛情を植えつけるものだった。グレアムはスクール・ハウスの子ども部屋を「石造りの教会と古い墓地を見渡せる乱雑な大きな部屋で、玩具戸棚や本棚、意地悪な目つきをした大きな揺り木馬、それに鉄のストーブ囲いのそばには乳母のための居心地のよい大きな籐椅子があった⁸⁾」と回想する。一方、三歳上のレイモンドは自伝 (*Moments of Being*, 1974) の序文で、ほかの兄弟姉妹と共有した揺り木馬にたいしてプラトニック・ラブを感じていた、と書いている。生涯にわたりグリーンのおブセッションの一つになる恐怖感ハハウスの生活から生れた。グレアムは鳥やコウモリにたいする恐怖感を母から受け継いだため、大人になっても羽毛の感触が嫌いで、コウモリは恐怖の対象だった。後にインドシナ戦争を取材したときの回顧として、コウモリを見るよりもヴェトミンの奇襲の方がまじだったと記す。グレアムは夜寝るときに気に入りのティ・ベアなどの動物たちの縫いぐるみをベッドに持ち込んだ。その中に嫌いなビロードの鳥が入っていたのは、「ベッドをいっぱいにするためだけだった」からだという。寝る時間になると火事にたいする恐怖感と家族から見棄てられたという孤独感から、ティ・ベアを床に放り出し、乳母に拾ってくれと叫び、乳母がやってくると、安心して眠ることができた。またグレアムは七歳になってから魔女に襲われる悪夢を見るようになったが、シェリーによると、悪夢はグレアムの想像力の産物であり、そのイメージは「快適さは現実ではない。現実には恐怖に充ちた出来事だ。ベッドに行く途中にある階段、踊り場にある何も入っていない食器棚、白い膨らんだ手と肉づきのよい顔をした魔女⁹⁾」である。またそれが「地下室」 (*'The Basement Room'*, 1936) に再現されているという。グレア

ムの鳥にたいする恐怖感ハ、「パーティの終り」 (*'The End of the Party'*, 1929) の中で、隠れん坊を始める時に、双子の兄のピーターが、「大きな鳥が翼を広げて弟の頭の上に影を落とす」のを意識するところにモチーフとして用いられている。

3

グリーンは自伝の中で、学校に入学したのは八歳の誕生日前だということを二度にわたって記している。

私は本を読むことが小学校への入学を示しているのではないかと恐れた (私は八歳の誕生日の二、三週前にあの陰気な門を潜った¹⁰⁾)。

私の誕生日は学期が始まった後の十月にくるので、八歳になる直前に入学した¹¹⁾。

シェリーはこれを追認して、「翌年の九月、八度目の誕生日の直前に彼は父の書斎の向う側の緑色のラジャ張りのドアを通してプレバトリー・スクールに入学した¹²⁾」と書いている。しかしグレアムの父親が提出した入学願書の文面はグリーンやシェリーの記述とは明らかに異なる。願書の内容は次のとおりである (筆者注：下線部は手書き)。

国王エドワード六世グラマー・スクール理事会へ

私は学校法人にたいしてヘンリー・グレアム・グリーン¹³⁾の入学を要請します。

チャールズ・ヘンリー・グリーン¹⁴⁾の息子。パークムステッド¹⁵⁾生れ。10月2日¹⁶⁾で8歳、スクール・ハウス¹⁷⁾で私と同居。

私は「退学の際まる一学期前に通知しないときは一学期分の寮費 (授業料と食費) を支払う」という校則に従います。

C. H. Greene

親または後見人

職業 校長

住居 スクール・ハウス、パークムステッド

1912年10月12日

No. 824 1912年10月17日受理¹³⁾

ろう。

(1999. 1. 7 受理)

これは保護者である父親が校長である自分自身宛てに出したほかには類を見ない文書である。グリーン自身もシェリーも入学の期日を間違えているのではないかという筆者の間にたいして、パークムステッド・スクールの図書館司書のバーバラ・エグルズフィールドは次のように返事を寄せた。

生徒は七歳から十歳までならいつでも、普通は九月学期(新学期の始まり)にプレバトリー・スクールに入学できると言えます。これは今でも決まっています。なぜグレアム・グリーンがプレップに八歳になって(でも八歳の誕生日を過ぎたばかりですが)入ったのかはわかりません。しかしプレップ・スクールは彼の父が1913年に創立したのですから、グリーンは一番早いときの生徒だったと思います¹⁴⁾。

グリーンがこの点を間違えたのか、あるいは意図的に書き替えたのかはわからない。けれども何かの理由で入学が遅れたのは事実である。グレアムの意識の中には学校にたいする拒否反応がすでにあったのではないかと推測することができるだ

注

- 1) Graham Greene, *A Sort of Life* (London: Bodley Head, 1971), p. 12.
- 2) *Ibid.*, p. 72.
- 3) Norman Sherry, *The Life of Graham Greene: Volume One 1904-1939* (London: Jonathan Cape, 1989), p. 68.
- 4) Greene, *A Sort of Life*, p. 72.
- 5) Graham Greene, *The Lawless Roads* (1939; London: Bodley Head, 1978), p. 2.
- 6) Marie-Françoise Allain, ed., *The Other Man: Conversations With Graham Greene* (London: Bodley Head, 1983), p. 30.
- 7) Greene, *A Sort of Life*, pp. 14-15.
- 8) *Ibid.*, p. 17.
- 9) Sherry, *The Life of Graham Greene*, p. 12.
- 10) Greene, *A Sort of Life*, p. 23.
- 11) *Ibid.*, p. 61.
- 12) Sherry, *Graham Greene*, p. 16.
- 13) 1993年6月、パークムステッド・スクールを取材したときに、図書館司書バーバラ・エグルズフィールドさんからコピーを提供されたことに感謝したい。
- 14) Ms. Barbara Eggesfield から筆者宛ての1993年11月9日付書簡。